

## 狂気をいやす神

——ネルヴァルにおける  
ディオニユス——

篠田 知和基

前稿<sup>(1)</sup>では統合失調症におちいったフランスの詩人ネルヴァル（一八〇八一—一八五五）の遺作『オーレリア』にみられた「許し」とそれによる作者の病からの治癒の希望を跡づけた。

しかしその論考でも記したように『オーレリア』がいかに希望の書のようにみえたとしても実際の作者はこれを書き上げて首をつって死んだのであり、作品の「希望」は現実には裏切られた。作者は、作中にみられたように同じ病院に収容されていた同病の何人かと会話をかわし、あるいは彼の譫妄を作品に書くことによつて精神の偏執をたちきつて、病状の改善をみていたかという疑問であり、結果においてのみ病状の進行をみる医師たちにとつては、自殺というその最後をみるかぎり病状は悪化こそすれ、改善はしていなかったことになる。強靱な精神が正確な現状理解のうえにたつて考え抜かれた自殺をすることもある

ということを精神科医はみとめない。ネルヴァルのばあい、入院していた精神科のブランシユ病院への支払いが滞っており、転々としていたホテルの宿代もはらえなかった<sup>(2)</sup>。唯一の肉親である父親に金策のためであれなんであれ、顔をみせにゆくことは気がすまなかった<sup>(3)</sup>。ゴータイエその他の友人たち、そして『オーレリア』がのつた「パリ評論」や劇評誌などから雑文をかく約束でわずかな金を前借するのも、つてや可能性のあるところはすべてあつた。『オーレリア』第二部の原稿料もはいるかどうかわからない。原稿はいまポケットにはいつている。これをもつていつて何日分かの生活費をだしてもらえらるだろうか。実はそれが最後の頼みの綱だったのである。これを書いてしまったらもうこれ以上は書けない。しかし、原稿は未完の体裁のまま、このままで編集者にうけとつてもらえるかどうか自信がなかったかもしれない。印刷させるための唯一の手立てが自殺だったという推測もなりたつ。原稿がポケットにはいつていたというのも、それを活字にするための演出だったかもしれない<sup>(4)</sup>。「廃屋でみつかつた手記」などという売り込みの文章が雑誌をにぎわせていたのである。自殺者が残した手記という売り口上をつければ雑誌にのる可能性もある。そうでもなければ、編集者に書き直しを要求されるかもしれない。前借どころではない。そうなつたら、その間どうやって生きてゆくのだろうか。「パリ評論」は前貸しなどしそうもない。そのへ

んのことをかんがえめぐらせたはての自殺であつてみれば、かならずしも病状の悪化のしるしとは言えないだろうが<sup>(5)</sup>、それはともかく、そこへいたるまでの彼の病歴をたどつておこう。パリ大学医学部の学位論文でネルヴァルの症状を論じたものをまえに読んだことがあるが、とくに目新しい知見があつたわけでもない。ここでは、ある時期のネルヴァル学の泰斗だったジャン・リシエの学位論文<sup>(6)</sup>から病歴をひろつてゆく<sup>(7)</sup>。

リシエによれば、ネルヴァルの病気の発症は一八四一年で、『オーレリア』に記述されたとおりでであるという。それまでにまったく前歴がなかったのかどうかはわからないが、騒ぎをおこして警官に身柄を保護されたのはおそらくこれが初めてだろう。警察沙汰をおこしていれば新聞記者たちもほつておかないし、記録ものこされる。てんかんなどの発作ならとくに問題にするまでもない病気として始末されたかもしれないが、どうもその証拠もないようである<sup>(8)</sup>。

『天才論』のロンブローゾなどによると、母親のいない幼時、父一人子一人の少年期はあきらかに精神の異常傾向を助長するものだという。それがまさにネルヴァルの幼時だった。幸せな家庭生活に守られて育つた子供には異常児になる可能性はすくない。逆に不幸な家庭であれば、少年はその出自を否定し、家系幻想に走つたりもするだろうし、偽名も父親を否認する方法であるという。ネルヴァルも父親の名前はラブリュニーだが、

ネルヴァルの筆名はローマ皇帝ネルヴァからとつたともいう。そのネルヴァルは「阿呆の王」一八三二や「魔法の手」一八三二などの中世に題材をとつた奇譚で、人知をこえた宿命に翻弄されるあわれな人間をえがいたが、「ラウール・スピファム」一八三九では精神病院の「ビセートルの王」といわれた人物をめぐる評伝で、鏡にうつつた自分にお辞儀をしたり、自分を王になつたとおもいこんだりするところを描いた。狂気のテーマは早くからつきまといつていたのである<sup>(9)</sup>。

彼の実際の病気の発作は一八四一年二月二日あるいは二三日とされる。これが『オーレリア』一部二章に描かれたもので、カデ街を歩いていったところで<sup>(10)</sup>、着ているものをぬぎすて意味不明なことをわめきちらしていると警官たちにとりおさえられ、ピクビュス街のサンマルセル女医のところへかつぎこまれた。その後、発作がくりかえされたために、エスプリ・ブランシユ病院へ搬送され、そこに一月末まで滞在する。その間にジュール・ジャンが「デバ」誌に彼の「墓碑銘」と称する「追悼文」一八四一をのせた。だれもが、この病気からの回復はないものとおもつたのだ。

翌年の暮れ（二月二三日）、彼は文壇への復帰をかけて、東方への旅にでる<sup>(11)</sup>。カイロに数か月滞在し、レバノン、コンスタンチノープルをへて翌年二月五日に帰国する。その間の紀行文を「カイロの女たち」のちに『東方の旅』として発表、

好評をえる。これは最終的には一八五一年にシャルパンティエ

から出版される。しかし同年九月にはふたたび「狂気」の発作をおこし、エミール・ブランシュ病院に収容される（その前年にもオサンドン博士の治療をうけている）。このときは一月末までの入院で退院したが、翌年一八五二年一月には丹毒 *erysipèle* のうたがいで、今回は市立のデュボア病院に収容された。一八五三年二月と三月にもデュボア病院へ収容されたが、自主的に退院、しかし八月二五日には街頭で発作をおこし、慈善病院へ収容され、ついで、ブランシュ病院に移った。そこを早めに退院したあと発作をくりかえし、再入院をした。翌一八五四年は再度の復活をかけて再び東方の旅をこころみだが、はたせず、かわりにドイツに赴いたが、パリへかえるとただちにブランシュ病院へもどることになった。五三年八月二七日から五四年五月二七日までブランシュ病院に入院している。このころほかに住むところがなかった。そして一八五五年一月二六日、パリの街頭で首をつって死んだ。

五二年の市立病院への収容については『オーレリア』で「夜のあいだ、とくにあげがた、縛られていることがわかると錯乱がひどくなった」<sup>(12)</sup>と言っている。彼の収容されていた病棟はクルミの木のうちわたつひろびろとした遊歩道に面していた。「わたしはそこに雑多な財産の名残をあつめていた。二〇年前にもついていた家具でその、ほとんど売り払ったものの残りだっ

た」<sup>(13)</sup>。

『オーレリア』に記された自身の「狂気」の記録と称するものがどれだけ正直なものかわからない。狂気について彼は早くから異常ともいえる関心をしめしていたのである。有名なのは上述の『幻視者』におさめられた「ピセートルの王」であろう。初出は一八三九年、「デ・グランジュの殿、ラウール・スピファムの奇妙な伝記」、「ラ・プレス」である。作者三一歳のときの文章である。作品は「一六世紀の中頃生きていたひとりの奇妙な人物の狂気について物語ろう」という文章ではじまる。

ラウールは所領をもたない貴族で、生活のために法学部で法律をまなび、かけだしの法官になっていた。ちょうどそのころフランソア一世が崩御し、王子のアンリ二世が即位していた。新王は王の交代のあいだ閉廷していた高等法院の開廷式に臨席した。ラウールは法官席の末席にいた。大法官の演説のあいだ、新王は退屈まぎれに並み居る法官たちの顔をながめていた。その視線がひとりの顔にとまり、そこにくぎづけになった。法院中のひとびとの視線も王の視線のあとをたどった。そこには王に瓜ふたつの顔があった。ラウールだった。人々は以来、彼にむかってたわむれに「陛下」と呼ぶようになった。その結果は、彼の良識とヒエラルキー感覚をはなはだしく狂わせることとな

り、大法官に反論し、国法の不備をあげつらったりするようになった。あげくは法官としての職を停止させられるにいたったが、そうであってもこりずに法院へやってきては控えの間でひとびとをつかまえて彼の改革案をぶちあげたりした。家族のものは困惑のあまり、彼の公民権停止の訴訟をおこした。その法廷での審問をおえて外へでると、あちこちから「王だ、王様だ」という声がかきこえた。それをきくと「すでにゆさぶられていた彼の知性に、不安定なほねのゆるみによって引き起こされた衝撃をあたえることになった」<sup>14</sup>。ラウルは自身を王そのひとと思へとびざっていった<sup>14</sup>。ラウルは自身を王そのひとと思へとびざっていった<sup>14</sup>。ラウルは自身を王そのひとと思へとびざっていった<sup>14</sup>。ラウルは自身を王そのひとと思へとびざっていった<sup>14</sup>。

その譫妄が一段と深い所へおちたのは独房にそなえつけてあった鏡をみたときだった。彼はそこに王がやってくるのを見たのである。彼が王のままで平伏すると鏡のなかで王も腰をかがめて答礼した。このときは自身を王と思うのではなく、なんらかの陰謀によってとらえられ、そこへ押し込められているものの。王はそれを知って心をいためているものだった。その病状の変化をみて、牢番たちは彼を大部屋にうつすことにした。

そこでほかの病人と一緒にになると彼はそこに廷臣たちをみだし、もう一つの宮廷をつくりあげることになった。まずは彼の栄光をうたう宮廷詩人クロード・ヴィニエだった（似た名前のクロード・ヴィニオンは現実の宮廷画家だった）。

似たような状況は『東方の旅』の挿話「カリフ・ハーキムの物語」にもみられる。カリフに瓜ふたつの青年が、陰謀によって王の位置につけられ、そこへ本物のカリフがやってくるのである。カリフはそれをハシツシユの幻覚だと思ふ。でなければ分身幻想である。

そして『オーレリア』一部三章「このときから実人生への夢の流出とでも呼びたいものがはじまった」、「すべてのものがとくに二重の相をとるようになった」<sup>15</sup>。「論理的な判断にけることもなく、ほんのわずかなことでも、起こったことについての記憶が失われることもなかった」。「ただ、一見ばかげたようにみえるわたしの行動は、人間理性が幻覚と呼ぶところのものに従っていた」。彼は着ているものをぬいで、自分の星とみなしていた星の光線に吸い寄せられるのを感じた。そこを夜警たちがとりかこんだ。彼は不思議な力が体にみちあふれるように感じ、夜警たちを投げ飛ばしていったが、最終的には取り押さえられ、詰所へつれていかれた。そこで天空に天体の軌道がいくつもの巨大な円をえがくのを見ていた。

二人の友人がやってきて、彼をひきとっていこうとした。し

かし、同時に拘留されていたもうひとりの男が彼らとともにでていった。「人違いだ、むかえにきたのはこのおれだ！」と叫んだが、独房にいれられた。「そこで何時間ものあいだ、獣のような状態ですごした」<sup>16</sup>。そのときは前に来たようにおもった友人たちが来てひきとつてもらったが、その晩も前の晩とおなじ時刻になると発作がおこり、「わたしのまわりで生起する光景の意味やつながりがわからなくなった」<sup>17</sup>。その状態が数日つづいて、精神病院へつれていかれた。これが一八四一年の発作と入院と思われる。

このときの入院では「医術をつくしての治療の結果、健康をとりもどしたが、わたしの精神のなかに人間理性の規則的な流れをとりにどすには至らなかった」<sup>18</sup>。

それでも「紙をもらい、幾時間もかけて、無数の像をえがき、そこに物語や詩や碑銘をあらゆる言語でかきそえた」<sup>19</sup>。一種の芸術療法である。しかしそこで描いた怪物たちが夢のなかにはいつてきて彼をおびやかした。それでも「しだいに精神に落ち着きがもどってきた。そして、わたしにとつて樂園にひとしかったその施設を去るときがきた」。しかし「宿命的な状況がずっとあとになってからの再発を準備していた。そこではそれから奇妙な夢の流れが、中断のあとでまたむすびなおされるのだった」<sup>20</sup>。これが五三年の再発であろう。二部四章のおわり、ドイツ詩人（ハイネ）の家へいって、「もうだめだ、おしまいだ」

と口走り、辻馬車がよばれて、デュボア病院へ運ばれた<sup>21</sup>。

このときはとくにはげしい発作をおこしたわけではない。ただ、極度の疲労と厭世観から、パリ中をさまよいつつながら何度もセーヌ川へとびこもうとしたりした。空の星がいつせいに消え、そのかわりに黒太陽と真つ赤な月がのぼるのをみた。「そのときからわたしの病状はさまざまに変遷をへながらもとにもどっていった」<sup>22</sup>。しかし「二か月間、パリの周辺の巡遊を再開した」というから、デュボア病院はすぐに退院したようである。「すこしずつ文章をかきだして、最良の小説をひとつしあげた」。しかし「その数日後から、頑固な不眠症にかかった」。「一晩中、モンマルトルの丘をあるきまわって日の出をながめた」<sup>23</sup>。そんなあるとき、中央市場のほうで金貨や銀貨を空中へほうり投げたりした。金貨一枚というのはいつの時代でも一か月の生活費くらいの価値がある。彼の「最良の小説」の原稿料でもあったかもしれない。その後、彼の生活は極貧の状態におちこむ。そこに来かかった通行人に平手打ちを食わせたり、郵便配達夫がキャバレへはいるうとするのを妨げたりした。そのあとチュイルリーへむかったが、公園は閉まっていた。そこでサン・トウスタシユ教会のほうへもどつて食事をし、聖母の祭壇の前でひざまずいた。そのあと、父親の家へゆき、動物園へいった。その日の行動はまだつづくが、これだけくわしく一日の行動をおぼえているというのはおどろくべきことだ。毎日の生活を要約

して、数日分を一日のなかに再構成したのかもしれないが、ほとんど一時間ごとになにをした、どこへいったと記録しているその偏執ぶりが異常にみえる。これを書いたのはおそらくその二―三年後のはずである。宿なしで、日記などつけているわけではない。原稿をかきちらしてポケットにつっこんでいたというのが、この一日の行動記録をかきとめていたとおもえない。そのあととはげしいにわか雨になり、そのまま大洪水になるかと思うが、サンクトウスタシユで買った指輪を水たまりに投げると雨がやんだ。そのあと四時に約束をしていたので若い友人ジョルジュのところへゆき、濡れた服をぬいで、ベッドにはいつて仮眠をとった。夢のなかに女神が現れて救いを約束した。目がさめるとジョルジュとともに外へ出た。コック街で帽子を買い、パレロワイヤルへまわり、サンクトノレ街へ出た。そのあたりで人ごみにおされてパニックになり、辻馬車にのせられて慈善病院へはこばれた。朝になって花壇の中をあるきまわっていると、病入たちのあいだにいるのがわかると、それまでのすべてが幻覚だったことがわかった。ここまでの四八時間の記録は微に入り細にわたる。

『オーレリア』には一〇年にわたる闘病と入院のあいだの狂気と夢の記録がおさめられているようにおもうが、じっさいは四一年の発作と二―三年後の五三年の発作について詳細な、かつ

臨場的な記録があるだけで、ほかはそのころ見た夢で、四九年や五一年の入院については記されていない。したがってその四一年と五三年の発作についても、詳細をきわめる記録の信ぴょう性がとわれざるをえない。執筆は五五年一月である。二部の最後は原稿をポケットに入れて首をくくった。そこで描かれたのは四一年と五三年の発作にいたるそれぞれ四八時間の「記録」だが、直後の記録ではなく、十数年から二―三年をへたものであれば、それは「再構築」された「記憶」であって、実際の逐次の記録ではありえない。こんな夢をみたという夢の記録の方はいつまでも記憶にのこっていてもふしぎではない。ばあいによれば同じ夢をなんどもみるかもしれないし、つづきもののような夢をみることもあるだろう。一部四章、五章は第一の夢、六章が第二の夢、七章八章は目覚めてみる夢あるいは幻を紙にかいたもの、一〇章はそれが夢にはいつたものである。二部二章にはオーレリアを再度うしなう夢が描かれる<sup>(24)</sup>。四一年の発作の記録には、そのあとみた夢がいくつかつづいている。それらは夢としてはとくに精神の異常をおもわせるところはない。夢の中ならなんでもありうるのである。ただ、夢の物語としての論理的なつながりはかなりしつかりしていて、脈絡のある一貫した夢を紡いでいる。

夢と幻覚についてはネルヴァルはあえてわけていない。狂気は「夢の現実世界への流出」であるといい、「夢は第二の生」



であるというのである。ちなみにこの「夢は第二の生」という表現について一言しておく。邦訳では「夢は第二の人生である」とされることがおおいが、第二の人生という点、たとえば定年後の第二の人生などを思わせられる。ここはそうではなく、人はみな二つの並行した生をいきていて、片方がうつつ、他方が夢である。つまり夢は「もうひとつの生、あるいは存在」であるという意味である。

『オーレリア』全編をとおして語り手は、狂気<sup>25</sup>という神の病の試練をくぐりぬげ、その狂気の秘密を夢にさぐっているのである。「夢の現実への流出」があるときには「狂気は現実の夢への流出」なのである。一般に夢は現実の体験を夢の論理に転換して追体験するものとされるが、現実のうち、あきらかに非論理的なものが夢にはいったときに、その非論理性がいつそうあきらかになるといつてもいい。夢には二種類あり、角の扉をとおってきたものと象牙の扉の夢とがあり、前者が正夢で、後者がいつわりの夢であるという。大浜甫氏はネルヴァルがこの二種類の夢を区別していた様子はないというが<sup>26</sup>、とくに一部九章の夢など、それを否定しようとしているところがあり、「わたしは恐ろしい神秘をのぞきみようとして呪われたのだ」という。二部一章では「なんということを書いたのだろう。キリスト教的な謙譲からはこのような言い方はできない」などという。一部四章、五章の夢は角の扉の夢、九章、一〇章の夢は

象牙の扉の夢となるのではないだろうか。ところで、この「角の扉、象牙の扉」だが、「角の門、象牙の門」ともいい、門なのか扉なのか判断としない。たとえば、フランスでよくみかけるガラスの扉は、ガラスの門とはいえない。一方、鳥居のようなその下をくぐるものであれば、扉がなくとも門であることがある。角と象牙という材質はいかなる建造物に相当するのかわからないのである。門柱なのか、門扉なのかである。どちらとも角や象牙の形態とは一致しないように思われる。現実的にもつともありえるのは門扉の取っ手であろう。角の取っ手、象牙の取っ手である。それを角の扉、象牙の扉というのであれば、門というより扉のほうがふさわしい。金の扉、銀の扉もおなじだろう。門構え全体ではなく、門扉あるいは取っ手だけ金や銀であつても金の扉、銀の扉といっているのである。そして『オーレリア』の夢はすべてが角の扉をとおってくるものではなかった。しかし最後の「メモラブル」の夢では「救世主」が新エルサレムの「螺鈿の扉」に鞭でふれると、彼らは光につつまれるのである。ここも「門」ではなく「螺鈿の門扉」であろう。そこにいたるまで、夢の扉をおしあけながら、「夢を固定し、その秘密を知ろうとした」<sup>27</sup>。ここでは夢の扉は「神秘的な扉」になっている。いずれも「押し開ける」扉である。

「扉を押し開ける」ことは、思想的にはイシス信仰における試練をへて、女神の啓示をえたこととされるが、イシスの教え

はオシリスの教えでもあった。オシリスは冥界の王であり、ギリシヤではディオニュソスである。ディオニュソス、この狂気のはてにインドまでいった神は、そこからもどってきてプリュギアの山中でおおひなる女神キュベレに抱きしめられて狂気から癒えた。いろいろ、狂気を癒す神、縛めをほどく神になった。ディオニュソスといえは酒と演劇の神とばかり思われるが、ネルヴァルにとっては狂気を癒す神としての性格が重要だった。

ディオニュソスへの帰依は、「シルヴィ」で「太鼓を食べ、シンバルを飲んだ」というディオニュソス秘儀の謎の文言を紹介して、演劇人としてディオニュソス秘儀の試練に服したことがあきらかにされているが、その秘儀の本当の目的は狂気からの解放だった。

ディオニュソスへの関心は初期の「一六世紀の詩人たち」一八三〇からはじまっているとみてもいいかもしれない。そこで取り上げられたロンサルはたしかなディオニュソス信徒だった。彼にはディオニュソス賛歌「デイチュランボス」などもある。ネルヴァルを詩の世界へみちびいたのがそのロンサルである。

ディオニュソスについて、演劇界でのイニシエーションをみちびいた。劇作をし、劇評を書いた。

その演劇の世界では、しかし女優との不幸な愛が彼を狂気につきおとした。

その狂気からの癒しをもとめて彼はオリエントへおもむいた。イシスの足元に跪こうとしたのである。彼にとって旅は狂気からの癒しの手段だった<sup>28)</sup>。一八四一年の狂気は四三年の東方の旅で癒した。イシスの夫オシリスⅡディオニュソス<sup>29)</sup>がその癒しをみちびいた。一八五三年のそれは『ローレライ』に描くドイツの旅で癒した。ローレライは狂気の精だった。ドイツではだれも、彼を狂人とはみなさない。ドイツからオランダへまわるとそこは北のバツコス祭の真つ最中だった。ドイツの旅はバツコスのでてくるヘルダーの「プロメテウス」からはじめて、エラスムスの『狂気礼賛』をへて、バツコス（ディオニュソス）にみちびかれる狂気からぬけだす旅だった<sup>30)</sup>。副題の『熱狂的旅行者の印象』とは、バツコスのエクスタシーの旅ということであろう。『追憶と逍遙』ではモンマルトルに墓があるという聖ドニを第二のバツコスとしている。「ディオニュソス巡礼」がそこから始まるのである<sup>31)</sup>。

しかしもちろん、狂気をなおすというディオニュソスの神徳は、信徒団のなかにおいて、すぐれた治療師としての導師がたとえは手かざしなどをして表すのでなければ、たんに個人的にディオニュソスを信奉してただけでは実現することはなかったろう<sup>32)</sup>。ネルヴァルはオルベウス教であれ、ディオニュソス教であれ、あるいはイシス教であれ、なんらかの秘儀宗教に信徒としてくわわって信心をし、宗教儀礼を実践するというこ



とはしなかった。またそれらの宗教の導師としてすぐれたゲール（導師）が活動していた記録もない。異国の地への旅が「気晴らし」の効果をあたえたことはたしかだろうが、それ以上ではなかった。むしろ執筆が、それもとくに自身の病状を告白・公開するような執筆が「そうやって、長いこと頭にすみついていたヴィジョンから解放される」と自身言っているように<sup>(33)</sup>、偏執観念からの解放をもたらすことがあったが、一方では「最良の小説」と自負していた「シルヴィ」などを書いた時は「校正にひどく苦勞し」そのあと病状の進行をみた。「狂気を癒す神」はそのような効果を標榜する教団がある種の靈感治療のようなことをおこなって治療実績を宣伝することはありえなくはないが、ネルヴァルのころのフランスではそのような宗教はしられていなかった。ネルヴァル自身、症状の悪化を自覚すると自発的にブランシュ病院へ入院しており、医学の実績に信頼をよせていた。それでも当時の精神疾患の治療は薬剤による化学療法はしられておらず、精神分析も未発達だった。唯一有効な治療は、経済的不安をとりのぞいて、ゆっくりと休養をとりながら、自己観察を重ねるくらいだったが、ネルヴァルのばあいは、休養をしていれば収入はとだえ、生活費におわれるだけではなく、入院費、治療費の支払いがおもくのしかかってくるだけであった。病状の悪化も、自殺という結末も、経済的不安が重要な要素になっていた。『オーレリア』以外での彼自身の病状につい

ては、書簡で「神経の奇妙な興奮はかたづいたものとおもっていたが、この一週間ばかりまたぶりかえしている」（一八五三年一〇月七日）。あるいは一〇月二日には「ほかの病人たちと一緒にされることで神経質になっている」ともいつている<sup>(34)</sup>。その状態をぬけだすために、旅行をかさね、イシス、あるいはディオニュソスの「試練」をみずから貫徹しようとしたのである。いかなる教団の信者でもなかったが、ディオニュソスの徒となりきること、病を克服しようとしていたのである。ディオニュソスの徒とは、もちろん演劇人であり、「逍遙」のなかに「追憶」を追求する放浪のエッセイストであった。そして最後の『オーレリア』はディオニュソスの狂気の「忠実な」記録として、ディオニュソスにこそささげられるものだった<sup>(35)</sup>。

註

(1) 「ネルヴァルにおける罪障感と許しと治療の期待」、『心の危機と臨床の知』一七。

(2) 一八五四年一月二日の父親宛ての手紙では、出版社その他から五〇〇フランと三五〇フランを受け取り、それでブランシュ病院の支払いと、ながらく気になっていた借金をしはらったと書いている。ブレイヤード版全集一九六五、巻一、一一六〇頁。一〇

- 月二〇日づけの領収書では『バリ評論』から一〇〇フラン受け取ったとしている。(『プレイヤード新版全集、一九九三、三巻、八九九頁』)
- (3) そのまえにブランシユ病院に持ち込んでいた家具類をひきとってほしいと病院からいわれたときも父親はことわっている。息子に關する面倒なことにはできればかわりたくなかったようだ。四一年の発作のときも彼は父親にあてて、「これ以上、金の心配をしてもらいたくない」と言っている(旧版八八五頁)。
- (4) これについては伝説だという説もある。警察の取り調べにおける所持品一覧にはハンカチ一枚はあっても原稿はなかったという。しかし、つねにありあわせの紙切れに原稿やメモをかいてポケットにいれていた習慣からすれば、『オーレリア』の原稿ではなくとも、なにかのメモはあつたはずである。すべて無用の反故・紙屑として警察で処分されたのかもしれない。一八五四年一月とみられる『バリ評論』の編集長、ルイ・ユルバックあての手紙では「ポケットにいったい原稿をつめこんでいる。おいてゆくとなくなってしまうので」といっている(新版九〇四頁)
- (5) 中原中也の死について「ある尋常ならざる道をへて詩人の高みに達する天才にとって、もつとも自然な道は夭折である」と福島章が『天才の精神分析』新曜社一九七八でのべていることを参考にすると、ネルヴァルの死も天才の必然であったともいえなくはなからう。みずからの人生を見極めつくしての死をえらんだ川端康成もおなじだろう。老いることへの不安についてはリシエも指摘している(『ネルヴァル、経験と創造』一九七〇、六四二頁)。
- (6) Jean Richer, *Nervul. experience et création*, Hachette, 1963 (第二版一九七〇)
- (7) リシエの研究と彼の編集した旧版の全集については若い世代から批判がされているが、いくつかの瑕疵があつても、彼の全業績を否定しうるものではない。とくにアンドレ・ブルトンに評価されていた文学者・神秘学者としての業績の独自性と重みはかわらない。
- (8) 松井好夫は『ネルヴァルの生涯と精神病理』一九七三でネルヴァルを癲癇とみているが、梶谷哲男は懐疑的である(『精神科医から見た西欧作家』)。
- (9) 一八四一年三月五日の友人あての手紙では「私の病気は別にたいしたことはありません。こんな神経の発作はずっとまえから何度も経験しています」といっている(旧版八八七頁)。
- (10) カデ街にはフリーメイソンのグラン・トリオン(大東方会)本部がある。そのまえに「どこへ？」と問われて「オリエントへ」と答えたのは、このグラン・トリオン(大オリエント)をどこかで意識していたからかもしれない。
- (11) リヨンからの父親あての手紙(二月二五日)に「友人たちもうしなつてしまった恐ろしい病気」について語ったあと「そのような状況からなにかおおきな行動によってぬけだし、こういったこ

- との記憶を消し去らねばならない」と書いている（旧版九〇九頁）
- (12) プレイヤード版全集、一九九三、三卷、七三七頁。
- (13) 同前、七四二頁。
- (14) プレイヤード版全集、一九八四、二卷、八八九頁。
- (15) プレイヤード版全集、一九九三、三卷、六九九頁。
- (16) 同前、七〇一頁。
- (17) 同前、七〇一頁。
- (18) 同前、七一頁。
- (19) 同前、七一頁。
- (20) 同前、七二五頁。
- (21) 同前、七三五頁。
- (22) 同前、七三五頁。
- (23) 同前、七三五頁。
- (24) オーレリアのモデルと目される女優はすでに死んでいた。しかし、『オーレリア』では、その女優が死後、彼の魂の救済のために中介の労をとるように想像される。しかし、彼女との待ち合わせに遅れ、彼女が地獄へさらわれる夢をみる。
- (25) もちろん彼自身は「狂気 (folie)」とはいわない。「病氣 (maladie)」あるいは「夢の現実への流出とよぶところのもの」と言った言い方をする。そして同じ病院に収容されている患者については *aliens* と書く。
- (26) 大浜甫『イシス幻想』芸立出版、一九八六。
- (27) 新版全集三、七四九頁。
- (28) 「旅がいい効果をもたらすということ、そしてすっかり回復したと感じているということが大事だ」と父親にあてて書いている。旧版一一二六頁。
- (29) オシリスとディオニュソスが同一神であるという観念はプルタルコスらによって、通説となっていた。ネルヴァルがイシスの名をあげるときは、その夫としてのオシリス、すなわちディオニュソスが喚起されたのである。
- (30) 父親宛ての「一八五二年五月二日の手紙でも、「旅と転地は健康だけでなく若さもたらした」といっている。旧版一一二四頁。
- (31) この間、四四年にはオランダへ旅行、四五年ロンドン旅行、四六年以降、サンリスなどパリ近郊への旅をくりかえす。四九年ロンドン旅行、五〇年ドイツ旅行、五二年オランダ旅行、五四年ドイツ旅行と「北方」への旅をかさねる。作品のほうでは五一年の『東方の旅』とそれにいたる断片的紀行の発表、四五年はラ・ブレズ誌の劇評を担当、四七年『モンテネグロの人々』を準備、四八年、ハイネと共同で『ドイツの詩人たち』を準備、四九年、オペラ・コミックの『パリから北京へ』を執筆、五〇年は「子供の車」をオデオン座で上演、五一年、「クイントゥス・オクレール」執筆、五二年『幻視者たち』、『ローレライ』、五三年、『ボヘミアのちいさな城』、五四年『シルヴィ』をふくむ『火の娘たち』、そして五五年の『オーレリア』と充実した創作活動をおこなっている

る。とくに四三年から五〇年にかけてまとめた『東方の旅』は全集版で六三〇ページの大作であり、全体の構成も緻密で、精神活動の遲滞をうかがわせるところはない。

(32) ジャンメル『ディオニューソス』に「これらの秘儀（コリュバースらによるディオニューソス秘儀）が狂気の治療に際し一般的に用いられる方法であった」とある。一八〇頁。

(33) 「頭からロマンチックなむかでを追い払う」ともいう（リストあての書簡、新版八七一頁）。

(34) 旧版全集一〇六二―一〇六七頁。

(35) この点についてはストリンドベリーについてつぎのようにいわれていることがネルヴァルにもあてはまるだろう。「彼は自己の病的体験を作品の上に投影することによって己の心の平安をたもつことができ」た（春原千秋・梶谷哲男『精神科医から見た西欧作家』、毎日新聞社、一九七九）。

（しのだ・ちわき／比較文学・ヨーロッパ神話論）